東京に暮らすネパールのひとたち

＜ TBS ラジオ「人権 TODAY」の取材現場から　崎山 敏也 記者

Q1 東京周辺にはどれくらいのネパール人がいるのですか？

ネパールはインドと中国に挟まれた内陸の小さな国です。世界最高峰のサガルマータ（エベレスト）があるヒマラヤ山脈を始め、山がちで、産業を発展させられるところが限られます。海がないため貿易もしにくく、地下資源もありません。昔から隣のインドや歴史的に関係が深いイギリスに働きに行く人がいました。1980 年代頃から、若者を中心に、もっと生活を向上させたいと、国によって働く制度は異なりますが、東南アジアや中東の国々、そして日本へも来るようになったのです。

Q2 どうして日本に来たのですか？

2019年の時点で、東京都内には約２万５千人、周辺の神奈川県、埼玉県、千葉県も合わせると約４万６千人がいます。最近、家の近くにインド風カレーのお店がオープンしたりしていませんか？メニューに、ネパール風の餃子「モモ」や、ネパールのビールがあったら、隣の国、インドで調理の資格をとったネパール人が経営か料理をしている可能性は高いでしょう。また、日本語学校、そして調理や宿泊業の専門学校で学び、日本でホテルやレストランに就職する人も増えています。

日本の人が一人ひとり違うように、ベトナムの人もネパールの人も一人ひとり違います。ベトナムでもネパールでも、あるいは他の国の人でも、自分の周りや学校にいたら、いろんな話をしてみませんか。

Q3 日本ではどんな暮らしをしていますか？

ネパールは多民族、多言語、多宗教国家で、民族や宗教、出身地などによって、日本でも暮らし方は様々です。一例として、隣のインドにも多いヒンズー教徒の祭「ホーリー」が、江戸川区など各地で開かれています。カラフルな色の粉と水をかけ合う、春の訪れと豊作を祝う祭りです。また、インド風カレーのお店ではなく、ネパール料理中心のお店を開く人も増えています。東京・新大久保などでは、豆のスープにご飯、カレー味のおかずに漬物という定食「ダル・バート」も食べられます。

Q4 日本で暮らして困っていることはありますか？

調理の資格で働く男性が家族を呼び寄せて一緒に暮らしたり、留学生が増えているので、女性や子供、若者の割合が多くなっています。日本の学校で子供をどう受け入れるかも大切ですが、一方、東京・杉並区には、ネパールの方法で教える学校があります。

取材したTBSラジオの中村友美さんによると「将来、ネパールに帰る可能性がある子供が学んでいます。日本語しか話せないと、ネパールでの暮らしに困ったり、祖父母や親戚とうまくつきあえず、寂しい思いをする」ということです。

Q5 どんな楽しみや夢を持って、暮らしていますか？

ほとんどのネパール人にとって、外国で暮らす家族や親戚がいるのは当たり前です。外国で働く人が送ってくるお金で家族の暮らしが成り立つこともよくあります。だから、日本で教育を受け、日本の会社に勤めたり、日本で商売を成功させようと考える人もいるし、日本で働いて得たお金や、身につけた技能を使って、将来はネパールで暮らすという人もいます。日本が、ネパール人にとって暮らしやすく、また、一人ひとりの夢や希望をかなえられる国であってほしいものです。

※本原稿は、東京都人権プラザ企画展「写真で知る“世界のともだち”」展（2020年7月27日～12月12日）の解説として執筆されたものです。本文中の統計データ等は執筆当時のものです。

執筆：崎山敏也／制作：東京都人権プラザ、2020年12月